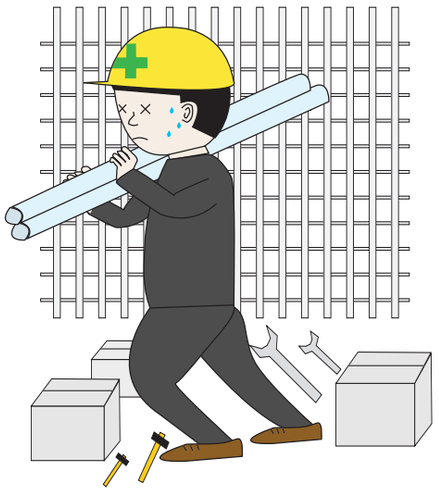
がんばれ!! ばいとくん

第72回　深夜の「会場撤去」



ばいとくんは遠いところを旅していた。初めて見るものばかりですべてが新鮮に感じられる。だが今、最後のお金が尽きてしまい途方にくれていた……。

「どうしよう。こうなったら多少仕事が大変でも時給の良いバイトをしよう」

そこでばいとくんは１日限定で、バスケットボール大会の会場撤去のバイトをすることにした。

バイト当日、最後の試合が終わって帰路に着く人々を尻目に、ばいとくんは集合場所へ向かった。そこに集まっていたのはいかにも体育会系といった体格のいい人たちばかり。

「こんな人たちの中で大丈夫かな。やっぱりぼくは学生だし、こういうバイトに応募しない方が良かったのかも……」

一抹の不安を抱きながらも、夜10時にバイトが始まった。まずは数時間、会場内・外のモニュメントの類を解体して運んだ。立派なモニュメントを壊してしまうのはもったいなく感じられるが、これをするのが今回の仕事である。

解体した大きな荷物を持って、２階席とフロアーの間の階段を何度も往復した。

「重い……こんな仕事がこれからずっと続くのか」

しかし、これはまだ始まりに過ぎなかった。次に、観客席を支えていた数え切れないほどの鉄パイプや金具などを解体して運ぶ作業を繰り返した。

「きつい、眠い……」

「おい、ぼけっとするな、やることはいくらでもあるんだ！」

少しでも手を抜いていると現場監督から注意される。そしてその監督の横を、ばいとくん１人ではとても持てない量のパイプを抱えた女性作業員が通り過ぎていく。

「やっぱりベテランの人はすごい。ぼくも負けていられないな。仕事しながら効率の良い運び方を見つけていこう」

それから、今まで経験したことがないくらいすさまじい早さで時間が流れていった。

「大変だけど、お金をもらう以上は全力を尽くさないといけないな。今は、逃げちゃだめだ」

バイトが始まってから約７時間、仕事が一段落ついたので休憩が入る。

「もう、くたくただ」

疲れ果てていたばいとくんは、床に座ってぐったりとしていた。

「君、若そうだけど大学生？」

ばいとくんの隣に座って休んでいた人が不意に話しかけてきた。その人は普段は翻訳の仕事をしているが、仕事がないときはこういった１日限りの短期バイトで生計を立てているとのことだった。

それから周りで休んでいた人達も話の輪に加わった。お金を貯めるために定職が休みの日にバイトをしている人、職を失ってバイトをしている人……、ばいとくんは普段接することがないような人たちと色々なことを話した。

「旅費を稼ぐためにバイトに申し込んだ僕と違って、生活のためにバイトをしている人がほとんどなんだな。旅をしながらバイトだなんて……やっぱり僕は恵まれている」

ばいとくんは強くそう思った。

「よし、また始めるから集まれ！」

監督の声が聞こえた。20分ほどの休憩は終わり、仕事が再開された。

今度は今までに解体して、ひとまとめにしておいた鉄パイプなどを、大型トラックに積み込む作業を行った。荷物が次々とトラックの中に運ばれ、フロアーがきれいになっていく。

そして、この作業をしているときにようやく朝日が顔を出した。

「あと少しでこの仕事も終わり。よし、頑張ろう！」

残された力の限りを尽くして、ばいとくんは働いた。

自分の仕事が終わり、最後に弁当が支給された。それを食べながらばいとくんは思った。

「こんなに大変な準備や後片付けをする人たちがいるから、いろいろなイベントが成り立つんだ。今日はいい勉強になった。バイトしてよかった！」

朝８時、バイトが終わった。バイト代を受け取り、一回り成長したばいとくんは会場を後にした。

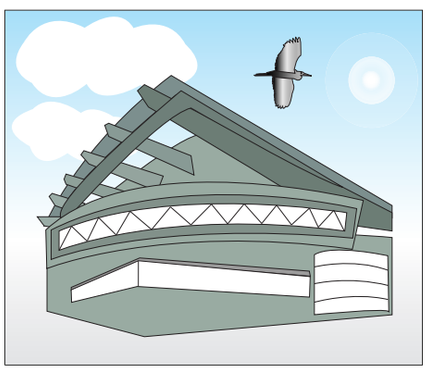
通勤・通学の人で駅はいっぱい、新しい１日が動き出そうとしていた。

「さあ、新しい１日の始まりだ！」

ばいとくんは、電車に乗り込み再び旅に出た。

終わりなき「旅」へ……。

（onion）



次回

ばいとくん感動の最終回!?

はみだしすてーじ

ホンダにやられました。
⇒けれど１位はルノーでしたよね？

（工・１　ずいかく）
（ぼくは「SUPER AGURI F1」を応援しています；編）